

91	ガソリンスタンド	畑中紀世彦	2006.03.10
92	太陽と私	田房絢子	2006.03.16
93	花束	新藤 理	2006.03.17
94	落ちこぼれ	亀貝一義	2006.04.04
95	男の子、女の子	芳賀 慈	2006.04.05
96	『担任（その2）』	杉野建史	2006.04.18
97	チーム『鳥國』	畑中紀世彦	2006.04.24
98	ひなとおばさん	田房絢子	2006.04.25
99	春のコンサート	新藤 理	2006.04.29
100	バキラ	芳賀 慈	2006.05.02
101	それぞれの旅立ち」・その1	金澤拓紀	2006.05.07
102	それぞれの旅立ち」・その2	金澤拓紀	2006.05.08
103	シーズン終了...しかし同好会誕生！』	杉野建史	2006.05.09
104	3つの嬉しいこと	畑中紀世彦	2006.05.13
105	読書の春	田房絢子	2006.05.16

9 1 ガソリンスタンド 畑中紀世彦 2006.03.10

先日高等部の T くんが、「ガソリンスタンドのアルバイトを探している。」というのを聞いた。スタンドでバイトをしていたあの頃、...青春時代の懐かしい思い出がよみがえってくる。

18歳で免許を取り、毎日のように車を運転するようになったのはいいが、いざ車を持つと分からないことばかり。そこで、車の知識が得られて、時給が高い、一石二鳥のガソリンスタンドでのバイトをやり始めたのだ。

実際に始めてみると、車の知識はどんどん入ってきたけれど、それ以上に接客、販売、取引業者とのやりとり、事務的な仕事などなど、車以外でも今まで知らなかった世界がそこにあり、まだ学生だった私にとっては、学ぶことがとても多いバイトだった。振り返ってみると、現在社会人として働く基盤となっていたと思う。

T くんが、もしこのエッセイを読んでいたなら一言。ガソリンスタンドは T くんにとってもきっと面白いバイトだと思うよ！ でも、車はみんなとても大切にしているから、それを扱う大変さや責任について身をもって学ぶでしょう。そしてなによりも...冬が辛い。

9 2 太陽と私 田房絢子 2006.03.16

私はちょっとだけ背が低いんだけど、第1の原因は遺伝だろう。田房家は全体的にこじんまりしている。

第2に、小さな頃から体を動かすのがあまり好きではなかったということだ。本を読むのがとにかく好きだった。だからあまり太陽の光を浴びたり、走り回ったりすることがなかった。赤ちゃんの頃

もあまり太陽の光を浴びなかつたらしい。すくすくと成長はせずに、丈は途中で止まった。予定では160センチくらいになって、すらっとしたワンピースやパンツスーツが似合う女性になるはずだった・・・のに。

結局なにが言いたいのかという、身長伸び具合と少年期の運動量の関係はよくわからないけど、運動をするということと太陽の光を浴びるということは、身体にも精神衛生上にもよろしいということである。というか、大人になってやっとそれに気が付いた。この職場にきてから、太陽の光を浴びて活動することが多くなったからだ。カヌーをして、水辺で遊んでくたくたになったり、登山できれいな景色を見て心が豊かになったり、得るものが多いなあをつくづく思う。それに去年スキーを始めて、なんだかはまってしまっている。そんな自分がちょっとかっこいいな、なんて思ったりもするので、精神衛生上、余計によろしい。

もうすぐ雪が解けて、活動的な季節になる。大好きなオレンジ色のマウンテンバイクが、今か今かと主人を待っている。今年はお弁当も持って、少し遠出してみようかななんて思ったりもする。
・・・サドルをぐっと高く上げて乗ることができたら、もっとかっこいいんだけど！

9 3 花束 新藤 理 2006.03.17

毎年恒例、kitara でのコンサートに出演した。気分良く演奏を終え、楽屋に戻ると、新藤宛に大きな大きな花束が一つ。メッセージカードも一枚添えられ...と思いきや、実はホチキスで閉じられた何枚ものカードだった。

「kitara ってすごい広いですね！ビックリです。ビックリしすぎて目がくらみます。高所恐怖症にはケッコウ辛い。でも、きれいなバショなので、落ちついてみれそうです。いやア、kitara ってすごい広いですね！ビックリです。」

「いつもブル部で色々と教えてくれている新藤の演そを初めて聞くのでとても楽しみです。いい演そを期たいしています 愛をこめて」

「えんそう楽しみにしてるヨ～！がんばってください。しんどうさんのコトだからまた女の役やってたりして...(笑)」

「がんば!!(色々) 黒ぶちメガネー」

「いやあ～おさむ chan がんばってネ!! ちゃんと笑いとりなさいヨ～ 遠くでまばたきしないで見るから 楽しみにしてるヨ～」

送り主はもちろん、自由が丘の生徒たちだ。kitara のことしか書いてないだろ、とか、「演そ」ぐらい漢字で書きなさい、とか、呼び捨てだのおさむ chan だの、もう少しわきまえるべき礼儀っちゅうもんが...なんて突っ込みたくなる気持ちが半分。照れくささと嬉しさが半分。

「いつも通りテキパキと卒式準備し、美しくおいしい料理をしあげた後で更に美しい音色を楽しみに来ました。 奴らめ... もうどこにもいない...」

生徒たちの、忙しそうな楽しそうな表情が目浮かぶ。彼らは昼から学園に登校し、フェアウェルパーティーを開いていたのだ。ここ数年恒例のこの企画、「夜にはみんなで新藤さん出演のコンサートを聴きに行く」というところまで恒例なので、私は調理や食事に参加したことがない。メッセージの主は、引率の芳賀さん。羊の群れのように動き回る生徒たちを、畑中さんとともに牧羊犬よろしく引き連れていただいた。みんなの楽しい一日のしめくくるため、新藤もステージで奮闘してまいりましたよ そう語りかける気持ちで眺める、大きな大きな花束。

舞台の撤収を終えて楽屋口に出ると、終演からずいぶん時間が経っているのに生徒たちがにこにこ待ちかまえていた。ダメじゃないかこんな遅くまで...と注意する前に「ありがとなあ～」と言ってしまった自分はまだまだ甘いなあ、なんて思いながら、つられ笑顔のまま、生徒たちを家に帰した。

9 4 落ちこぼれ 亀貝一義 2006.04.04

この語は茨木のり子さんの詩の題であり、詩集名でもある。今年の2月に79歳で亡くなった代表的詩人の一人であった。教科書にも「わたしが一番きれいだったとき」などは載っていたのではないだろうか。

「落ちこぼれ」を引用しておこう。非常に示唆に富む詩と思うから。

落ちこぼれ

和菓子の名についたようなやさしさ

落ちこぼれ

いまは自嘲や出来そこないの謂(いい)

落ちこぼれないための

ばかばかしくも切ない修業

落ちこぼれにこそ

魅力も風合いも薫(かお)るのに

落ちこぼれの実

いっぱい包容できるのが豊かな大地

それならお前が落ちこぼれる

はい 女としてはとくに落ちこぼれ

落ちこぼれずに旨(うま)げに成って

むざむざ食われてなるものか

落ちこぼれ

結果ではなく

落ちこぼれ

華々(はなばな)しい意志であれ

9 5 男の子、女の子 芳賀 慈 2006.04.05

フリースクールは今年、7人の新入学・体験入学生を予定している。3月に十数人の卒業生を送り出したら、ここ数年なかった男子優勢の人数比になった。さらに前掲の7人のうち5人が男子である。女の子の華やかな笑い声が当たり前だった毎日が、どのように変わっていくのか楽しみでもある。

一般的にフリースクールに通う女子といえは内気でもの静かだと思われがちらしいが、そんなことは改めて言われないうらい、当の彼女らは元気である。むしろ、男の子の方がいつも圧倒されている。女の子は組織力があるので、学園行事やミーティングのときなど大きな力を発揮するし、持ち前の強引さ(!)が物事の結論を導く。

ところで学園スタッフは今25人ほどいるが、男女比でいうとちょうど半々で、20代から60代まで全ての年代が同居していることになる。こちらの「女の子」(ボランティアさん)の組織力も素晴らしい。貴重な時間をボランティアとして子どもたちと向き合ってくれているのだから、取り組みも前向きだし工夫もあって大いに勉強になる。もちろん「強引」ではありませんよ、念のため。

9 6 『担任(その2)』 杉野建史 2006.04.18

2006年度、2学年を担任することになった。

現在の2年生は1年次に転入でしてきた生徒が多く、クラスが落ち着いたのは昨年末だった。それ

までは1ヶ月に1、2名の割で見学者を迎えそして転入生として向かい入れることを繰り返した。だから、今のクラスができあがってから4ヶ月ほどしか経っていないことになる。

更に言えば、今のクラスの雰囲気になったのは今年の2月。北海道教育大学釧路校の学生が授業研究で訪問してくれたときからだった。とても礼儀正しく、エネルギッシュな学生たちだった。気持ちよさと、熱心さが伝わってくるナイスガイ達だった。そのエネルギーを受けてか(?)生徒達のそれまで蓄えてきたエネルギーが溢れ出た。学生達の熱が大きな引き金になったことは間違いない。

学生達の訪問が終わって、学生の一人から「どうしたらこんな学級を作ることができるのか?こんなに一人ひとりが笑顔でいられるクラスになるのか?」と言う質問を受けた。その学生はこの4月から教壇に立つ。そのときは機会がなくて答えられなかった。

「学級経営」が大切であると思う。

高校生年齢の子どもはとかく集団を好まない。そのくせ寂しがり屋で、一人で行動することが大嫌いである。私は「集団としていられる空間」「個人としていられる空間」がクラスであると考えている。この場合、空間は物理的かつ精神的な2面性を持つ。そしてクラスは、全ての生徒が満足感を得られる集団でなければならない。全員が同じ瞬間に満足感を得られることも重要(非常に望ましい)であるが、それぞれ違った場面で得られることも重要である。

自分の欲求が満たされることは人間にとって非常に大切であり、他人(存在や意見)を認めることができるための最低条件となっている。おとな子どもに関わらずそうである。

その最低条件を満足させることが担任の仕事の第一歩であると思う。

97 チーム『鳥國』 畑中紀世彦 2006.04.24

今から8年ほど前、学校を卒業して独り暮らしを始めた。当時の職場は独り暮らしが多く、毎週金曜日は花金と称して、仕事を終えると揃って夕食に出かける。行き先は『鳥國』、住宅街の一角に赤ちようちんの灯る小さな居酒屋だ。安くて量が多く、そこそこ美味い、そして何より気の良いマスターの魅力に惹かれて、私たちはいつもそこに集まった。徐々に他の常連客とも仲良くなると、マスターと常連客で草野球チームを結成した。チーム名はもちろん『鳥國』。普段運動しない連中なので、チームはいつも大敗だった。そして試合後は決まってマスターの店で反省会をする。反省会とはいうものの酒を飲んでバカ騒ぎするのが一番の目的なのである。平日仕事を頑張って、週末は『鳥國』、というのが当時の私たちのステータスだった。

しかしそんな『鳥國』生活も長くは続かなかった。店は、立地条件の悪さで経営がうまくいかず2年後に閉店した。草野球も、転勤などでメンバーが揃わなくなり自然と活動できなくなっていった。あれから5年、昨晚久々にチーム『鳥國』の仲間たちが集合した。あの頃20代のメンバーも今では全員30代。近況や昔話に花を咲かせ、あの頃のようにバカ騒ぎをした。「久々に野球やるか?」と誰かが切り出した。「でも人数が集まらないなあ。」「じゃあ全員が40歳を超えたら試合しようぜ。それまでユニフォームはとっておけよ。」10数年後の草野球復活と、それまでの個々の活躍を誓い合って、久々に集合したチーム『鳥國』は再び解散した。

昨晚の宴を思い出す。こうやって心を許して騒げる仲間がいるのは嬉しいものだ。

98 ひなとおばさん 田房絢子 2006.04.25

2歳半になる、ひなという姪っ子がいる。その進化の早さには本当に驚かされる。何ヶ月か前までは単語だけだった会話が、今はセンテンスでできるようになった。大人が周りで迂闊に口を滑らせると、なんでもすぐに覚えるようになった。最近覚えたのは、ひいばあちゃんが使う「たまげた。」「ひな、たまげたわ。」と的確に使うそう。う~ん・・・。

それにも増して、最近は疑問文の嵐。なにかにつけて、「これはどこで買ったの?」「これはどこか

「来たの?」「なにしてるの?」「いつ遊びに来るの?」決してイエスノークエスションではない。もう解放してくれよお・・・と言いたくなるけど、その探求心とスポンジのような吸収力が、この子の後のなにかに結びつくに違いないと、一生懸命におばさんは答えるのだ。

実際にこの探求心が大切なんだろうと思う。大きくなっても、というか大きくなったら特に、何かを探ろうとする力や疑問を持ち、答えを見つけようとする力というのは、時に強く求められる。自分が何をしたいのか、何を求めているのか、自分自身にとって重要なキーワードを見つけられる力にもなる。これは進路選択を間近に控えている3年生と接することもあり、最近特に考えることだ。自分で切り拓いていく力というものは、ますます必要になるだろう。「なぜだろう」「なんだろう」と思うことから、まずは始まる。

ひなも今のように好奇心旺盛にこれからも育ってほしいものだと、おばさんは日々思う。

ちなみに私はおばさんではなく、「あいあい」と呼ばれている(ちなみに1年ほど前までは「あやや」だった・・・笑)。似合わないとか、変だとか言うならば、どうぞご自由に・・・。でもこれからもおばさんとは決して呼ばせないのだ!

99 春のコンサート 新藤 理 2006.04.29

春風の強さと冷たさに声をあげて、プラスアンサンプル部の生徒たちと出かけてきた。教育大学まで、コンサートを聴きに行ってきたのだ。

教育大サークルプラスバンドのメンバーには、楽器の指導のために何度か来ていただいたことがある。チューバ奏者の内田さんにいっては、指導に来た足でそのまま「フリースクールのボランティアをしたいと思います」と志願してくれたほど。そんなサークルプラスバンドの方々の「スプリングコンサート」が行われていた。

クラシックの難曲から童謡・ラテンナンバー・歌謡曲にいたるまで、幅広いジャンルをカバーするところが吹奏楽の魅力だ。教育大の皆さんは、そこへさらにダンスやクイズ大会まで持ち込んで、観客の心を離さない。もちろん生徒たちは大喜び。クイズ大会にも、どの観客より猛烈な勢いで参加していた。

正直、ツメが甘く聞こえたところも無くはない。曲想を自分たちのものにして演奏するにはもう少し練習が必要だったかもしれない。でも、終演後にある団員の方に聞くと、準備から本番までわずか2週間しか時間をとれなかったそうだ。短期間の間によくぞここまで、とも思う。生徒たちにいっては、「何で2週間であんなコンサートが...?」と、驚いたような自信をなくしたような複雑な顔をしている。

ところが、さらに後に聞いた話では、団員の皆さんはコンサートの直後から「うまくいかなかった...」と落ち込んでしまい、泣く人あり、放心する人ありと惨々たる様子だったという。後日、みんなで大反省会を開いたそうだ。

大学生になっても、それがサークルという名称であっても、心は「部活」なのだ。ステキな話だと思う。いつまでも終わらない向上心。ぜひまた学園に来て、生徒たちにそんな心を伝えてやってほしい。

100 パキラ 芳賀 慈 2006.05.02

植物を育てるのが下手だ。一時期凝ってベンジャミンやら幸福の木やらカポックやらたくさん買い集め、せっせと水やりし、本を見ながら土に肥料を混ぜていたら次々と枯れていった。多年草の鉢植えを買っても、必ず1年で消えていく。そのうち、あきらめて買わなくなった。

ところが先日、友人がパキラをくれた。謹んで辞退していたのだが、これは強いから大丈夫という言葉に押されて、今部屋に飾っている。久しぶりの緑の登場に、視線が自然に向く。これはあまり構

わない方が良いらしい。「あまり」というのがミソで、この私にかかってきちんと育つか、彼の生命力に期待するのみである。

家の周りも気になるので、手入れをしなくても楽しめる植物はないかと本屋さんに行ったら、土いじりしたくない人のためのガーデニングの本はさすがに1冊もなかった。インターネットでも、見事に手入れしている庭ばかり紹介されている。上手な人は、フィーリングでどンドン増やしていけるものらしい。フィーリングを養うには、やはり場数が必要なのだろう。ここでもハードルが高い。とりあえずは、リビングのパキラのヒーリング効果を楽しむことにしよう。

101 「それぞれの旅立ち」・その1 金澤拓紀 2006.05.07

中学時代からの友人がこの春から関東の大学の講師となり、先日、その友人家族を見送るために苫小牧のフェリーターミナルへ出かけた。これまでは自由が丘の目と鼻の先にある北大の연구원として勤務をしていたので、会おうと思えばいつでも会えるという思いがあったのだが、これからはなかなかそうもいかないだろう。とはいえ、これまでもそんなにしょっちゅう顔を合わせていたのかといえは実はそうでもない。夕張で生活をしていた頃に比べれば、札幌で働くようになったこの2年間は会う機会も増えたはずではあるが、それでも年に4~5回といったところではなかっただろうか。

大学時代は実家である青森へ冬に帰省すると、必ずその友人と大晦日の紅白歌合戦が終わった頃に待ち合わせをして、一緒に初詣へ出かけていた。しかし、それ以外は普段ほとんど連絡を取り合うこともなく、大学を卒業してからしばらくは顔を合わせることもない時期すらあった。それでも高校を卒業してからというもの、転職や結婚などの人生の節目といったものに関しては、間違いなく一番話を聞いてもらってきた相手であり、自分の生き方そのものに大きな影響を受けてきた存在であると感じている。

この春からは、ふと思い出して気になった頃にメールや電話で近況を報告するか、ひょっとしたら年賀状で年に一度の連絡を取り合うだけになるのだろう。だからといって関係が薄くなったと感じるわけでもないのだろうし、久しぶりに会ったとしても、たわいもないことを酒の肴にでもしながら、何事もなかったかのように会話が始まり、またいつの日か会えるだろうことを期待してそれぞれの生活へ戻っていくのだと思う。

102 「それぞれの旅立ち」・その2 金澤拓紀 2006.05.08

他の友人との間でも、何年かぶりにふと連絡を取り合うといったことはあるのだが、たとえ年賀状のやり取りだけであったとしても、そうした「縁」というものはできる限り大切にしたいものであると最近になって強く思うようになった。その年賀状のやり取りすらなくなっていた友人から、突然電話があったり、実家の方へ年賀状が届いて、「どうしてる？」といったメッセージがあったりしたときなどは、感動を覚えると同時に、連絡をくれたその友人へ感謝の念を抱かずにはいられない。

この春、高等部の2期生たちが旅立っていった。どうやらこのゴールデンウィーク中にも何名かの生徒同士が連絡を取り合って集まっていたようであるが、「クラスになりきれてないよなあ」というのがこのクラスを初めて見たときの第一印象であったことを思い返せば、これほど嬉しい知らせはない。それぞれの道において、新たな出会いがすでに始まっている卒業生もいるのであろうし、時の流れとともになかなか集まる機会が持たなくなるであろうことは必然の流れではあるが、学園を卒業しても再び集まろうと思えるクラスを築き上げた彼らには拍手を送りたい気持ちで一杯である。

そういえばこの夏、我が母校でも同窓会が開かれるらしい。高校を卒業してからもう12~13年が経つのだが、男連中はいい具合に腹が出始めている頃だろう。誰が来るのかもよく分からないが、顔を見た途端に話が盛り上がり、高校を卒業してから今までの時間をどのように過ごしてきたのか、聞きたくなる奴が大勢いるのではないかという気がしている。都合が付くならば是非参加して、家族

と自由が丘のことを語りながら、「またそのうちに逢うべ」という言葉を伝えたいものだ。

103 『シーズン終了...しかし同好会誕生!』 杉野建史 2006.05.09

G.Wで道内のスキー場のほとんどが今シーズンの営業を終えた。

私の2005~06スキーシーズンも終了した。

今年の冬もあまり多くは出来なかったが、数名の輩をスキーの世界に引きずり込むことに成功した。そして、札幌自由が丘学園スタッフスキー同好会を立ち上げた!? 主なメンバーは私を含めて3名と少ないが、活動内容は充実している。

メンバー1人目はBちゃん。小中高時代とスキーが大嫌い。一昨年、無理矢理スキーを買わせ一昔前のスキーよりも今のスキーは簡単に回ることを体験させる。ウェアも格好良いものを買って、まずは形から入った。スノーボードに横恋慕しそうになるがスキーにはまったようだ。常に安定した滑りを見せ、もっと上手くなりたいと向上心が強い。来シーズンも楽しみである。

メンバー2人目はHさん。昨年まではスノーボードでビュー~ビュー~ゲレンデを滑りまくっていた。今シーズン初め、ブーツと板を貸して数年ぶりにスキーを滑っていただいた。これまた一昔前の板と今の板の違いに驚き感激しスキーにのめり込み始めた。「スノーボードはもう古い!今の時代はスキーでしょ!!」と宣うほどである。運動神経の良いHさんはコブ斜面にも果敢に挑戦し幾度となくはじき飛ばされる姿が印象的だった。

そして私。大学時代にスキー部に所属し大会にも出場した。数年前までお気楽スキーで楽しんでいましたがマスターズ大会に参加して再びスキー魂に火がついた。来シーズンは3つの大会の参加を目標に、検定にも再度チャレンジしようと企んでいる。

同好会はスキーをした後に必ず反省会を行っている。自分の筋力の無さを痛感するので、タンパク質の補充を怠らない。そして次回に向けての自分の課題を明確にする。たまには道具のせいにする。生徒が色々なことに挑戦するのだからスタッフだって挑戦しないわけにはいかない。

104 3つの嬉しいこと 畑中紀世彦 2006.05.13

4月に新1年生の担任となって、早一ヶ月が経った。12名の連中は、口は悪いけれど、悪態の中にも優しさのある中々いい奴らだ。そんな奴らと一ヶ月を過ごし、嬉しいことが3つある。

一、 これまで遅刻や欠席は少なく、ほぼ毎日全員揃っていること。これは何よりも嬉しい。

二、 入学して最初のホームルームで「ふざけるときは大いにふざけよう。でも、やるときはやるクラスにしよう。」とまず生徒たちに言った。授業風景などを見ていると、皆きちんとやっていること、嬉しいです。

三、 いろいろな想いを抱きこの学園に入学してきた生徒たち。一ヶ月経ってどう思っているのだろうか、今日のホームルームで作文を書いてもらった。やはり不安なことはあるようだ。しかしそれ以上に、この学園で楽しんでいこうという前向きな想いを、全員が書いていた。嬉しいです。

例年1年生は他校からの編入が多い。これから新たなメンバーが加わり、クラスの雰囲気も変わっていくだろう。一人ひとり考え方も成長のペースも違うが、それらをお互いが認め合えるようなクラス作りを、急がずにじっくりとしていきたいと思う。生徒たちの前向きな姿勢に答えられるように。

105 読書の春 田房絢子 2006.05.16

先日、書店で「ダ・ヴィンチ・コード」を手にした。それから夜な夜な読み続け、最後は一冊通して読み耽った。久しぶりに読書に没頭し、読み始めると止まらない作品に久々の興奮を味わった。

世間では賛否両論のこの作品。物語としては、とても良く仕上がっていると思う。読者を惹きつけ、不思議な世界に誘い、しばし現実を忘れさせてくれる。真偽については??と思うところもあるが、

それがこの作者の意図でもあるのだろうか。これは実在するのか、これらは実際に対立組織なのだろうか……。疑問は尽きなく出てくる。それを調べようと、関連書籍を購入してみた。……。かなりはまっているらしい。

ここしばらく仕事関連の本ばかりを読んでいたのだが、やっぱりフィクションはおもしろいなど、改めて思った。仕事の後にスイッチオフする時間はとても大切で、やっぱり私にとってそれは読書なのだろう。と、思う今日この頃である。